



Title	公教育における母語話者教員としての役割と使命
Author(s)	田, 慧昕
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 8-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102667
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



2018年の3月に博士前期課程を修了した田慧昕(デンフィシン)です。現在大阪府下の公立小学校で日本語指導加配教員として勤めています。私は中国生まれ、中国育ちの中国人です。その私がなぜ、日本の公立小学校で教員として勤めているのか、また、母語話者教員として感じた課題や役割と使命について考えたことをお伝えしたいと思います。私と同じように、留学で来日し、日本の教育現場で働きたいと思っている方に、少しでも勇気、希望を与えられたら幸いです。

日本の公立学校で教員になるまでの道のり

私は2011年3月に留学で日本にきました。日本語教師を目指し、2012年に大阪大学の外国語学部日本語専攻に入学し、2016年に同校の言語文化研究科に進学しました。私が、初めてCLD児(多文化多言語の子ども)、母語・継承語教育という言葉を知ったのは、2014年の櫻井千穂先生の授業でした。しかし、当時の私は正直、母語・継承語教育は公教育に要求すべきものではなく、家庭教育でやるべきだと考えていました。バイリンガルに育てたかったら、国際学校に行けばいいじゃないか、いわゆるエリート教育の先入観がすごく強かったのです。そんな考えの中、2014年の夏の集中講義で、トロント大学の名誉教授の中島和子先生の授業を受けて、衝撃を受けました。バイリンガル教育はエリート教育に限らず、特にグローバル化、国際化を唱える今日の社会では、CLD児の母語・継承語教育が家庭だけで抱える問題ではなく、社会全体で考えていかないといけないこと、それは権利であり、ホスト国の義務でもあるということを考えさせられました。そして、4回生の時に、真嶋潤子先生(大阪大学名誉教授)が提唱する、「なにもなくさない日本語教育」という考えを知り、そこから、ずっと2018年の3月まで、真嶋先生の元で、年少者の言語教育、特に母語・継承語教育について学んできました。

私が公教育に携わり始めたのは2014年の夏です。櫻井先生の研究のお手伝いで、中国語のDLA(文部科学省により2014年に公開されたCLD児のことばの力を測るための対話型アセスメント)を実施するために小学校に行きました。その後、ボランティアとして小学校で中国語の絵本の読み聞かせや、教科内容の翻訳などの活動をしました。2015年に自立支援通訳に登録され、母語・継承中国語の授業に携わり始めました。自立支援通訳として、教育活動を行う中で、いくつかの課題に直面し、その課題解決に向けて、自分はどのように教員に働きかけたらいいのかをすごく考えさせられました。自立支援通訳は、週に数時間といった時間の制約や教員免許を持っていない者は一人で授業できないなど制度上の規定により、活動範囲が自ずと制限されます。また、学校運営に直接携わらないので、子どもたちを取り巻く環境を変えることは非常に難しいと実感しました。学校現場に入り、先生と子ども、保護者と関わっていく中で、公教育で教員になりたいという気持ちが湧いてきました。そこで、2016年4月から大学院前期課程を履修する傍らで、教員免許を取りました。2018年4月には、学校教育サポーターとして、現場の先生のサポートするスタッフとして中学校で勤務し、2019年4月からは日本語指導加配教員として小学校で働き始め、現在に至ります。

日本人教員と自立支援通訳による協働プロセス

前述の通り、自立支援通訳という立場では、色々と制限されるのは事実ですが、日本語教室の先生との話し合い、相談を通して、できることもたくさんあります。私が自立支援通訳として主に携わっていた仕事が母語・継承中国語の授業です。授業の主体は、日本語指導加配教員で、自立支援通訳は補助的な立場です。しかし、授業をしている中で、やはりいろいろと考え、思うことがたくさん出てきます。その考えを素直に日本語指導加配教員に相談したら、快く受けてくださり、共に実践することができました。

当時、私が思っていた小学校の母語・継承中国語の課題は以下の4点です。①校内の取り組みになりがち、②アイデンティティの育成に焦点をあてる授業プランがない、③教科との連携性が薄い、④日本人児童は聞き手にとどまっていることです。①の課題解決に向けて、校内だけではなく、校外とのつながりを取り入れた活動をしました。例えば、中学校区内のCLD児と交流したり、中国の小学生とビデオ交流をしたりしていました。②の課題解決にむけて、ルーツについての学習をしました。CLD児は常に、自分は何人なのかについて周りに聞かれ、自問自答しやすい立場に置かれています。自分は日本生まれ日本育ちだから、日本人だと思う、でも、国籍は中国だし、両親にも中国人だと言われている、社会と家庭の狭間に追い込まれ、どうすればよいのか分からなくなりアイデンティティが揺れる話を多く聞きます。私は何人であるかは他人が決めるのではなく、自分が決めることだと考えています。私はだれなの？どうしてここにいの？将来はなにをしたいの？といった問いに自分で答えられるような子どもになってほしいと考えています。その判断の材料、根拠の一つとして、自分のルーツについて知ることが大切だと思い、小学校の最後となる6年生の3学期でルーツについての学習を行いました。「自分のルーツ」「将来の夢」と「中国についての紹介」の3つのテーマをポスターセッションの形で、中国語と日本語の両言語で発表しました。当日、在籍学級の児童と保護者を目の前に、子どもたちは自信を持って、両言語で堂々と自分のルーツについて語ることができました。この活動を通して、自分がだれなのかの問題に直面した時、深く考え堂々と自分で答えるような大人になることを切実に願っています。この時期に、考えを行動に起こさなければ、何も変わらないことが分かりました。もちろん相談しても、様々な制約の中でできないこともあります。それはそれで、日本の学校の仕組みや規則を知ることができ、自分の知識が増えることに繋がるので、結果はともかく、まずは自分の考えを相談する試みが大切だと思いました。

日本人教員と母語話者教員による協働プロセス

私は2019年4月から、日本語指導加配教員になりました。母語・継承中国語の授業以外に、学年の集団の取り出しによる国語指導、日本語指導、中国語による教科指導、在籍学級の多文化共生学習も担当することになりました。

そこで、二つのことに励みました。一つ目は、学級担任と連携して、学級の児童も参加できる母語・継承中国語の授業作りです。例えば、5年生の国語科と連携して、CLD児が在籍学級で漢詩の授業をしたり、外国語の時間に、高学年による中国語講座を行ったり、音楽の授業で、中国語で歌を歌ったりしました。子どもたちから「中国語で春暁を詠むのは楽しい」「中国語をしゃべるようになりたい」「みんなと中国語で歌って、楽しかった」などの感想が寄せられました。また、日本人児童が分かるように掲示物や成果物はすべて二言語で作るようにしました。例えば、校区内にある物産店の紹介のポスターを二言語で作って、掲示しました。それを見た日本人児童やその保護者が中国のお菓子などに興味を持ち、物産店に行って買って食べたそうです。二言語で掲示物を作ることで、日本人児童や保護者がCLD児の言葉や文化に触れ、話題が広がり、さらに進んでCLD児の文化を味わうことができると思います。今日の日本社会では、母語・継承語の学習と聞いたら、そのルーツを持っている子どもだけのためにという印象がまだ強いのではないのでしょうか。学級の児童が参加すると言っても、発表を見るなど受け身の時が多いというのが現実です。しかし、教員間の連携をベースに教科と連携するなど工夫をすれば、学級の児童も参加できるような学習活動に転換することが可能であることを強調したいです。これがすべての子どもにとって有益な教育であり、多文化共生の真義でもあると考えています。

また、多文化共生の授業では、児童が主体的に多文化共生社会の構築について考え参加することを目標に、6年生では、日本に住んでいる外国人や外国に住んでいる日本人の生活や直面している課題などについて、動画や当事者の話を通して考え、みんなで仲良く生活できる社会をつくるために、今の自分たちにはどんなことができるのかを考えました。児童らは自分の経験や当事者の話から、誤解や差別が生じるのは、違う文化を持っている者を自分の常識で判断してしまうことが原因ということに気づきました。そして、自分の考えはすべてではない、まず違いを知ることが大切という意見が出て、そこで色々な文化や、その違いを調べ、まとめ、発表会などを通して保護者や地域の方に紹介することをしました。児童らは学校の中で異文化・異言語について知り、体験し、考えることを通して多文化共生の意識が芽生えたと思います。これは多文化共生社会の担い手を育てる上で、とても大切なことだと思います。私はその種を撒く人だと考えています。

二つ目は、CLD児と保護者が安心できる環境を整えることです。普段の教育活動の中で、大切なお知らせをその言語で作成し、届けることはもちろんですが、社会情勢が急激に変化した時に、どのように保護者と連絡をとればよいのか、特に行政ではどのようなことができるのかをすぐ考えさせられました。2020年1月の新型コロナウイルスによる、突然の休校発表、緊急事態宣言。児童も保護者も不安でいっぱいでした。しかし、どこに、だれに、どう聞いたらいいのか全然分からないというのが現状でした。行政から届いた文章は難しく、親にとっては難解です。教育委員会は、中国語版と英語版のお知らせを作るのが限界でした。では、フィリピン、ベトナムの親はどうするの？英語ですべてが対応できるのかという不安が湧き、管理職と日本語担当の先生と話し合い、「やさしい日本語」を活用したお知らせ作りをするように市外教(在日外国人教育研究協議会)を通して各学校に呼びかけました。情報マイノリティになっている保護者のところに一刻も早く正確な情報が伝わるように働きかけました。

そして、一教員として校務分掌も担当し、学校運営に携わり始め、日本語教室の在り方を見直しました。「なにもなくさない日本語教育」の方針を確立し、全職員に共有しました。「なにもなくさない日本語教育」とは「これまでに培ってきたものや背景などをリセットし、更新するのではなく、児童が持っている文化・言語・経験をもとに日本語教育を展開していくことで、自分に誇りをもてる子どもを育てる」という考えです。「なにもなくさい日本語教育」の方針に基づいて、本校では母語・継承語の授業は日本語教育の一環として捉えています。

母語話者教員の役割と使命

これまでの経験を元に、私が考えた母語話者教員としての役割と使命についてまとめてみました。大きく分けて三つあると思います。一つ目は、「つながり」を大切に活動を行うことです。学習面では、教科と母語・継承語のつながり、ルーツの面では、家庭とのつながり、中国とのつながり、環境づくりの面では、学校、行政、団体(市外教)とのつながりです。二つ目は、当事者意識を持って考え、発言することです。つまり、CLD児の保護者や子どもたちは何でどのように困っているのか、それを解決するために、和らげるために今の私にはどんなことができるのかを考え、行動することです。三つ目は、学級の児童が英語以外の外国語や文化に触れる機会を提供することです。外国語は英語だけではなく。英語以外の外国語や文化について知り、日本語や日本文化との相違を考え、自分の知識や考えをさらに広げることができると考えています。

母語話者教員の課題と展望

教員になり、活動範囲が広がり、たくさんの人と繋がることができました。しかし、それゆえに課題もたくさん見えてきました。私見ですが、現在の制度上では、母語話者教員への特別な採用枠がないため、どのような働き方を求めたらいいのか分からないというのが現場の偽らざる声ではないでしょうか。一般の教員と同じ働き方を求めるのか、通訳的な役割を求めるのか、それとも双方を求めるのか、特に小中学校では、その境が定かではないのが現実です。私が勤務している小学校では、母語話者教員の教員としての立場を明確にし、翻訳・通訳関係の仕事は自立支援通訳が担い、緊急時のみ母語話者教員が対応するなど自立支援通訳と母語話者教員の仕事範囲を明確に区別し、年度初めの日本語教室の説明会で学校全体に周知しています。

近年、少子高齢化社会による労働力不足の緩和の対策として、政府は外国人の就労や投資・経営管理のビザの条件緩和などを進めています。在日外国人数は今後も増えていく一方でしょう。それに伴ってCLD児も増え、国籍も多様化していくことが目に見えています。私と同じように、外国人で、公教育で自分の力を発揮したいと考える有志の方も増えてくると思います。そのため、母語話者教員が現場でどのような役割を求められているのか、どのような機能を果たせばよいのかが今後の大きな課題になると考えています。また、母語話者教員への特別な採用制度の考案も視野に入れるべきだと思います。私は、今後も「なにもなくさない日本語教育」を目指して、教育現場で奮闘しつつ、母語話者教員の立場のあり方について模索、提案していきたいと考えています。



日本語教室の伝統—獅子舞